

特集●中国の芝居

香港における

粵劇の現状と将来——研究者の立場から

湛黎淑貞（宣樂（香港）顧問
有限公司 董事長） × 陳守仁（元香港中文大
学音楽系教授） × 樋泉克夫（愛知大学現代
中国学部教授）

承前・陳慧思さんとの対談の翌日、香港島の繁華街に位置する香港第一日語暨文化学校の教員研究室の一角で、陳守仁博士、湛黎淑貞博士と鼎談の場に臨んだ。両博士の語り口から、共に粵劇振興に向けた熱い思いを痛感した。お二人とも研究者であると同時に、予想に違わず戯迷だったようだ。

樋泉 本日は、「中国の芝居——昨日・今日・明日」をテーマに、研究者、あるいは政府の粵劇振興政策に参画されているお立場から、香港の粵劇が抱える様々な問題について話し合っていきたいと思えます。そこで手始めに粵劇の現状をどう考えるのか。こんな点をキッカケに話

を進めたいと思います。

湛黎淑貞博士（以下、湛） 舞台、研究、政府の政策など多岐にわたりますので、まずは陳教授に口火を切っていただき、必要に応じて私が補足するという形で話を進めましょうか。その方が問題点が明確になると思います。それというのも、二

〇〇〇年以降、政府の政策が粵劇発展に大きく寄与していると考えるからです。樋泉 といいますと。

香港返還が粵劇の転機となる

陳守仁博士（以下、陳） それではご指名によって、まずは私の知る限りのことをお話します。後でいくつか参考資料をご紹介しますかと思いますが、とりあえずは口頭でお話ししましょう。

さて香港が返還された一九九七年は粵

劇にとっても画期的な一年だったと思います。返還を機に、香港人が香港の伝統文化に強い関心を抱きはじめ、一種の伝統文化再考といったブームが起こったからです。こうして、九〇年代には再び粵劇に目が向けられるようになったわけではありません。

殊に返還が実現した九七年前後には粵劇ブームが起こりました。観客はもちろん、劇団も役者も公演回数が増し、多種多彩な演目が舞台にのせられるようになりました。じつは八〇年代は粵劇低迷期で、年間公演回数は五百回ほどでしたが、九〇年代には年平均で二倍ほど、千回を超えました。

湛さんがおっしゃったように、九〇年代から二〇〇〇年代、それから現在と粵劇はますます盛んになっています。その背景には香港政府による粵劇重視策があるろうかと。政府が観客の要望に応え、様々な施策を積極的に実施しているからです。その一例が九五年に香港芸術發展局を発足させたことです。同局の下に置かれた戯曲小組は粵劇の發展に資金的支

援を行っていますが、もう一例は粵劇發展諮詢委員会ではないでしょうか。この委員会の発足は、いつでしたっけ。湛 二〇〇六年。それから基金会もあります。

陳 粵劇發展基金会はその後だったんじゃないでしょうか。

湛 あまりはつきりは覚えていませんが、前後一年の間だったように記憶しています。正確な年代はともかく、先に基金会を立ち上げて、それから諮詢委員会だったと記憶していますが。二〇〇六年から七年の間に、粵劇のための發展基金会を設立させ、莫大な予算を投入した。

一方の諮詢委員会ですが、こちらは粵劇振興政策を軸とする組織で、粵劇發展の方向を導く役割を担っているわけです。これとは別途に「兩岸三地」の文化交流を目指す委員会もあります。

樋泉 「兩岸三地」とは中国、台湾、香港のことでしょうか。「兩岸」は台湾海峡の兩岸を指しますが……。

陳 粵劇ですから台湾は関係ありませんね。ならば「三地」というべきでしょう。

湛 香港、マカオ、台湾。いや香港、マカオ、広州でした。

陳 そうそう。広州、マカオ、香港です。

湛 この粵劇發展基金会は、どうすれば粵劇を發展させることができるのかといった点に注力するなかで、国連教育科学文化機関（ユネスコ）に申請を続けた結果、粵劇が二〇〇九年九月三〇日に世界無形文化遺産として登録されました。基金会は香港における粵劇援助を目的とはしますが、じつは基金会発足以前から政府は動き出していました。

政府はマカオと中国大陸と交流し、世界無形文化遺産登録を共同で申請してきました。申請しないと登録してもらえないわけです。こういった努力が実つて、粵劇がユネスコ世界無形文化遺産リストに登録されたわけです。

ですから陳教授が話されたように、政府の地道な努力の末に粵劇振興策が具体化され、資金的基礎も出来上がったことになりました。

樋泉 政府というのは香港政府、それとも中国の中央政府ですか。



向かって右が湛黎淑貞博士
左が陳守仁博士

湛 香港特別行区政府です。しかし中国とマカオの両政府とも連携し、一緒に行動しています。

樋泉 それは中央政府ですか。それとも広東省の地方政府ですか。

湛 広州の地方政府です。つまり「三地」は広州、マカオ、香港……。

樋泉 それが「三地」の政府ということですね。ところで二〇〇六年に発足した基金会の活動資金の資金源は。

湛 香港政府です。政府に民政事務局 (Home Affairs Bureau, HAB) という組織があります。

特区政府の粵劇振興策

樋泉 ということは、この部局が粵劇発展に尽力しているわけですね。

湛 香港が英国の植民地となった当初に中国人管理を主とする総登記官署が生まれ、一九一三年に改組され華民政務司署となり、さらに布政司署政務科となり、返還当日の一九九七年七月一日にHAB

として新発足しました。主として社会福祉、公民教育、地域事業、体育・娯楽、文化関連の政策執行機関です。

HABは政策制定の最高機関ですが、政策策定に当たるだけではなく、予算もつけます。香港の粵劇の発展の状況に応じて、先ほどお話しした基金にも、民政事務局の下にある康樂及文化事務処 (Leisure and Cultural Services Department, LCSO) にも予算配分が可能です。

樋泉 この組織は劇団養成や学校での粵劇教育に、どのように関与しているのでしょうか。

湛 教育の話なら、私からお話ししましょう。私はもともと教育局に所属し、そこが最後の職場でもありました。今は定年退職しましたが、一九九四年には音楽組の主管を務めて、役者や他の関係者の協力を得て粵劇課程の作成に取り掛かりました。その結果、二〇〇三年に「粵劇合士上」(<http://resources.edb.hkedcity.net/~chiopera/>)という課程ができました。「合士上」というのは楽譜の表記法のこと、音楽では「ド・レ・ミ」を使い

ますが、粵劇では「合・士・上」を使います。粵劇を唱うとき、簡譜を使うときもあれば、工尺譜の場合もあります。工尺合士上は楽譜の表記法です。

陳 伝統的な楽譜表記法に使う文字です。

湛 教育面では、「粵劇合士上」はとても重要な役割を果たしています。「粵劇合士上」によって教え方が確立され、課程も出来上がりました。そして、私たちは小学校から大学まで学校での粵劇教育を求めたわけです。大学でも学生が音楽を履修する場合、粵劇は必修科目ですから、学生は必ず粵劇について勉強しなければなりません。香港の教育系統全体に粵劇課程がありますが、これはとても重要なことです。

この他、学校教育の八、九年の間、粵劇の普及について様々なプログラムがあります。たとえば教育局の下に香港学校音楽及朗誦協会という機関があり、毎年、「香港校際音楽節」を開催します。私たちは、そのコンクールに粵劇という種目も加えました。

陳 毎年、香港学校音楽及朗誦協会が主催者となって「香港校際音楽節」を開催します。かつては西洋音楽のコンクールでしかありませんでしたが、そこに粵劇という種目を加えたのですが……何年でしたっけ。

湛 一九九九年でした。他にもたとえば、他の機構とも協力して、香港電台（RTHK）、その5チャンネルに粵劇番組がありますが、私たちは教材を作ってRTHKのホームページに載せました。私自身はCD-ROMで「粵劇視窗」という教材を発売しています。ラジオ局と協力し試行錯誤のうえで完成させた世界初のCD教材です。

陳 一つのことですか。

湛 一九九五年でした。

陳 ネットでも見られます。

樞泉 現在でも可能ですか。

湛 はい可能です。じつは教育局のホームページでは、粵劇教育に関する全教材を、教え方も含めて見ることが出来ます。

樞泉 そういう努力の結果、どのような成果が上がっているのでしょうか。

湛 成果はとも明らかです。まず粵劇コンクールに参加する人が多くなりました。すべての学校で粵劇教育が行われています。いまは確実な数字や統計を持ち合わせていないので正確なことはいえませんが、すべての学校で粵劇教科書を使用しています。

ここ数年、ある調査を進めています。いずれ正確な調査結果を発表することになりますが、現時点でのラフな結果を言いますと、粵劇を熱心に見る年齢層は五〇歳から六〇歳代です。定年退職すると、チケットが半額になりますから。

でも驚いたことに観客の十二％は若者で、学校で粵劇を学んだ結果、自分からチケットを買って粵劇を見に行くわけです。粵劇教育への努力が実を結びつつあるということでしょう。今年は十二％ですが、来年はもっと増えるし、再来年はさらに増えるかもしれません。若者の関心を粵劇に向かわせないと、粵劇の将来は危ぶまれます。

たとえば七〇年代を振り返ってみますと、ビートルズなどの西洋音楽やテレビ

番組などがあり、当時の多くの子供たちは粵劇に接する機会が失われていました。学校でも教えてくれません。七〇年代より以前を考えますと、六〇年代には粵劇はまだ健在でした。学生の頃、私はラジオで聞いた記憶がありますが、その後、粵劇は日常生活の場から消えていきました。

植民地政府による 中国文化抑制策

陳（湛さんに向かって） 近々出版予定のあなたの著書が主張する植民地政府が意図的に中国のものを排除したことに關して話してみたら如何です。話すべきですよ。

湛 もうすぐ発表する新刊書があります。英語で書いた博士論文に基づいた著作です。内容は第二次世界大戦が終わった一九四五年から香港返還の一九九七年までの間の学校の教育について、新たに掘り起こした多くの資料に基づいて述べられています。

一九四五年から中華人民共和国建国の一九四九年の間、大陸では国共内戦が戦われていましたが、国民党と共産党は香港でも自分たちの思想を広げようと活動していました。そこで植民地政府は教育の場では政治に関する話は禁止としました。教科書は全部検閲を受け、中国の文化についても厳しい制限が加えられたわけです。

そこで中国文化の一翼を担う粵劇についての話題は、学校という教育現場に持ち込まれることはなかった、意図的に。そこに一九九七年の香港返還が待ち構えていたわけです。

陳 ちよつと付け加えたいのですが、植民地政府が考える政治的理由から、音楽の授業では中国の歌曲は教えられませんでした。

湛 中国の音楽は本当に少なかった。六〇年代から七〇年代にかけてですが、たとえば小学六年生の教科書ではわずかの民謡が扱われていただけで、他に中国の音楽はあまりありませんでした。

一九八三年に中国音楽の新課程に移行

しましたが、そんな教科書が使われることはありませんでした。粵劇教育振興に従事してきた私からするなら、新課程の教科書が使われなかった理由は判りません。政治が関心を払わず、研究体制も整わず、まともな教材が整わなかった。教員も教材もない。ないない尽くしです。ですから、学生も勉強のしようがありません。

新しい課程の構想段階で課程設計の専門家に聞きましたが、彼は文化を変えるには十二年の歳月が要るといいました。小学校と中学校がそれぞれ六年あり、合わせて十二年の課程を終わらせないと変わらない。そこで今、変化の兆しが見えはじめた。十二年の粵劇教育を経たからこそ、チケットを買って見に行くようになったのです。

樋泉 学校における粵劇教育の成果は、さらに期待できそうですが、肝心の役者はどうやって育てるのでしょうか。

陳 その話題に移る前に、学校教育について補足させてください。そこで少々話を纏めますと、一九九五年に「粵劇視

「窗」ができて、「粵劇合土上」は二〇〇三年。この間の一九九九年に粵劇のコンクールが新設されました。

湛 その他に細かいことではあります。政府からも様々な試みが提案されています。たとえば康楽及文化事務処が二〇〇〇年以来、毎年実施している「学校文化日」です。学校関係者のみならず、校外の方々も積極的に参加しています。康楽及文化事務処は一定の予算を持っていきますので様々なイベントを開催できませんが、学校と関係があるのは先ほど言った「学校文化日」です。

イベント期間中、生徒は会場に向き、演劇やダンスなど文化に関する項目のイベントに参加するわけですが、そこに粵劇も組み込まれています。学校の中だけではなく、外でも将来に繋がる嬉しい変化が見られます。

陳 学校教育についてさらに補足しますと、「粵劇視窗」と「粵劇合土上」ができたから、教材が豊富になりました。小中学校の先生にはすぐ使える教材があります。それだけではなく、課外活動（部

活）もそうです。音楽教師がいない学校や、音楽教師がいても粵劇は判らないという学校があります。そういう学校は外部の有資格者——原則として粵劇役者——を招聘しなければなりません。このようにして、先ほど挙げた教材を使った粵劇の課外活動ができるようになります。

非正式の統計ではありませんが、課外活動のインストラクターに「一九九九年から現在までの間、何校ほどが粵劇の課外活動を実施しているか」と尋ねたところ、「二〇〇校まではいかないが、五〇校は確実に超えている」との返事が圧倒的でした。どうやら一九〇〇年から今日まで、五〇から一〇〇校の小中学校で粵劇の課外活動を実施していると考えられます。この事実、とても重要だと思えます。

香港の音楽教育は湛さんが新刊書で指摘しているように、制限がとて多く、授業で粵劇を教えることができません。それというのも、音楽教師が中国音楽が判らないからです。振り返ってみます

と、私たちは中国音楽が判らないままに育ちました。音楽教師が中国音楽をマスターしていたら、教材を使って授業で粵劇を教えることができます。だが、そうでない場合は、粵劇役者に依頼して課外活動で教材を使って粵劇を教えることになりません。

湛 粵劇に関係する機関についてもう少し補足しますと、一九九八年に政府の教育局の下に「優質教育基金」という新しい機関が設立されました。ここは、粵劇のみならず学校の需要に応じて資金を提供します。一九九九年、私どもは香港教育大学（元香港教育学院）と協力して、三年の資金援助を申請しました。その資金を使って、粵劇役者を招請し、六〇校の小中学校に赴いて粵劇の公演を行いました。

役者は知識があり、舞台に立てますが、残念なことに一般の生徒に教えることはできません。もちろん事前研修を受けてもらった後、教育現場に立ち、先生方と協力してカリキュラムを作り、先生と二人三脚で粵劇を教えてもらいます。

実演が必要な時は役者さんに演じてもらいますが、教室の管理や座学の部分は先生に担当してもらいます。こういった試みを三年間続けました。三百万ドルを使いましたが。

学校現場での粵劇教育と

その問題点

樋泉 じつに野心的で敬服すべき粵劇教育が小中学校を舞台に展開されていることは判りましたが、プロの役者さんはどうやって育てるんでしょうか。

陳 先ほど説明したように、政府資金、政府諸機関、民間有志などの連携で基礎作りはできた。そこで今は収穫の時だと思えます。収穫の一環といえるのが、若者がこの業界に入り、粵劇を身につけるようになったことです。

ここで、もう一度、時計の針を一九九九年に戻しますが、香港演芸学院に戯曲の証書課程が新しく設けられたことは大きな収穫といえます。二〇一三年には学位課程が設けられました。じつは香港演

芸学院の発展の歩みから植民地政府による政策の変化もうかがえます。この学院の創立は一九八四年ですが、当初は演劇、ダンス、音楽、中国音楽の各課程はありましたが、戯曲はありませんでした。ここからも「植民地風」だったことが判ります。

私もが長年申し入れ続けたことで、九九年に証書課程が、一三年になってやっと学位課程が設立されたわけです。設立されてから三十年ですよ、学位課程が設けられたのが。他の学校は遙か以前から学位課程があり、そこで学んだ学生は修士課程への道が開けているわけですから、遅れています。とはいえ香港演芸学院の存在は、これからの香港の粵劇を考えた時、とても大事なことです。

役者養成のもう一つの道は、プロの役者さんの労働組合である「八和会館」にあります。粵劇を学びたい若者は香港演芸学院か、さもなくば八和会館付属の八和粵劇学院に進むことになります。八和会館は民間組織ですから証書発給のみですが、正式の教育機関である香港演芸学

院は証書、高級証書、学位を授与できます。現状では八和会館か香港演芸学院、この二か所で若者をプロの粵劇役者に育て上げることになります。

樋泉 とこで肝心な点ですが、いったい粵劇役者になったとして、はたして生活が成り立つのでしょうか。香港だけではなく、現在の世界をざっと見渡しても、伝統芝居の舞台一本で生活を維持することは難しいと思います。

陳 できませんね。たとえば八和会館ですが、八和会館は千人余の会員を擁するプロの組織で、役者だけでなく、照明、舞台美術、音楽担当などもあります。単なる推測ですが、役者の会員は約三百人でしょう。詳しいことは八和会館に聞かないと判りませんが、おそらく全員が専業というわけではなく副業を持っているはずです。舞台だけで生活ができるのは百人——名だたる役者——ほどではないでしょうか。

樋泉 じつは芝居は重要な文化の一環ですが、役者のみならず興行を成り立たせるための様々な人材が必要です。彼らを

育てることが肝要ですが、現実的に考えるなら、育て上げられた役者がどんな素晴らしい芸を身につけようと、その役者の生活が成り立たないなら、とどのつまり、その芸が生かされることなく死んでしまいます。

いくら若者が粵劇役者を目指そうと、肝心な点がおろそかであるかぎり香港粵劇の将来は明るくなく、粵劇を学ぼうとする若者の志を挫いてしまいかねない。芸と役者の生活については、どのようなお考えをおもちですか。

陳 ちよつと補足しますと、この業界で舞台だけで生計を立てられる人は、現状では限られています。他の人は学生に教えたり、ラジオで仕事をするなど、副業をしないわけにはいかないでしょう。

粵劇役者の育て方

湛 生計を立てるにはやはり副業ということになります。しかし、その人たちは情熱があり、粵劇普及を仕事の一部だと

思っています。

たとえば八和会館は他からの財政援助を受けて新人育成に充て、重点的に有望な新人を育て上げて舞台に送り出そうとしています。その場合、約半年間は舞台に立ち、あるいはリハーサルの日々が続きます。でも一番忙しいのは新人役者たちではなく、脇役です。日々、様々な役柄を演じなければなりませんし、他の仕事もあり、忙しすぎるといえます。そこで時々、リハーサルに顔を出さないことがあります。ところが新人役者は契約もありません。主役だけではリハーサルは意味を持ちません。とはいえ脇役の役者に毎日の参加を無理強いすることもできません。ここがいちばん悩ましいところ

です。たとえば伴奏の楽士です。香港には粵劇が好きなお金持ちの奥様がいますが、彼女たちは自分たちが演じる際、楽士を雇って伴奏を依頼します。素人芸が盛んになるほどに楽士の仕事も増えます。伴奏が増えれば収入も増えますが、

その分、忙しくなり新人養成に手が回らなくなる。そんな現実もあります。

樋泉 その金持ち夫人たちを京劇の「票友」と同じと考えてもいいでしょうか。

湛 はい、そうです。粵劇の票友は香港だけでなく、深圳まで出かけて行って演ずることもあります。深圳は人件費が安く、伴奏の楽士も安価で招請できるからです。まあ自己満足といってしまうては身も蓋もないでしょうが。

現に康樂及文化事務処が管轄する劇場の広告を見れば分かりますが、各種の票友集団が活動していますし、すべての劇場で、ほぼ毎日粵劇の上演があります。民間の団体による上演も政府機関による上演もあります。そんなわけで十年前とは全く違います。しかし、すべての問題は役者養成に収斂すると思います。

ところで日本で能狂言や歌舞伎といった優れた古典芸術の保存に成功したこのことですが、具体的にどんな方法を採用したのでしょうか。

樋泉 それぞれの流派、歌舞伎の場合は名門一族が中心になっています。政府に

よる政策的支援もあります。

役者養成について大まかに説明しますと、歌舞伎の場合は基本的に二つのルートがあり、市川家とか中村家とか代々が役者の家系出身の場合、特別の事情がない限り男の子は役者になるよう運命づけられているといつていいでしょう。いま人気の高い市川海老蔵は市川家の芸の継承者で、いずれ市川家の大名跡である團十郎を継ぐに違いありません。中村家の長男である勘九郎は、亡父を継いで勘三郎を名乗ることになるはずで。

一方、歌舞伎の家系に生まれなくても素質があれば舞台上に立てる道も開かれています。その場合、ひとつは国立の教育施設であり、もう一つは一派をなす役者の芸の上での養子になることです。

歌舞伎公演は、たとえば松竹など大きな興行会社が有望なエンターテイメント・ビジネスとして様々な手段を講じ、側面から歌舞伎という古典芝居を支えています。

陳 香港でも、若い役者の一部には血筋を引く者がいますが。

樋泉 じつは友人の息子さんの例ですが、ヨチヨチ歩き頃から歌舞伎に興味を示し、友人が劇場に連れて行ったら、そこで見よう見まねでミエをきってみせた。それを目にした有名な役者さんが素質を見込んで芸の養子に。その子は、いまや若手のホープとして歌舞伎の舞台上に立っています。惚れ惚れするような艶やかな舞台姿ですよ。

湛 興行のための宣伝などの仕組みはどのようになっていますか。私たちは本当に粤劇のスターを育てたい。だから、そのための方策を学びたいのです。ビジネスとして成り立つなら、若者にいい刺激となるからです。

樋泉 歌舞伎に最も深くコミットしている興行会社は松竹ではないでしょうか。

松竹が若手有望役者を、様々な手段を講じてテレビ、週刊誌、映画などなどエンターテイメント全般にわたって売り出す。そこで獲得したファンを歌舞伎に呼び込むわけです。さきほどの市川海老蔵など、その典型と言えらると思います。陳 そういった役者さんの教育レベルは

どうですか。粤劇でも新しいスターが生まれてほしいのですが、せめて大学までは行かせたいです。これは重要だと思えます。もし粤劇を演じたら大学の学位が取れないなどということになれば、やはり親御さんは子供が粤劇役者になることなど許しませんよ。じつは私どもは大学生にもつとこの業界に入ってほしいんです。

樋泉 歌舞伎役者の子供の多くは、大学卒業です。

陳 歌舞伎の稽古は何歳から始めますか。

樋泉 歌舞伎役者の子供たちは、どうやらヨチヨチ歩きの頃から。名だたる歌舞伎役者の家には稽古場がありますから、そこで徹底して鍛える。京劇の稽古の際に使われる「打戯」です。上手に稽古が出来たらできたで「打」く。間違ったら間違つたで「打」く。あれです。その上で、たどたどしいながらも台詞を口にするようになる。父親と一緒に舞台を踏む。それがまた興行として人気を博すことになるわけです。

陳 それは受験勉強に影響はないんですか。香港では粵劇の稽古をしたら受験勉強できないという問題があります。

樋泉 歌舞伎役者は男です。ですから名門の家に生まれた子供は、極論するならば本人の意思に拘わらず舞台上立つ。あるいは、そう運命づけられていることを彼らは生まれながらに受け入れるんじゃないでしょうか。第三者には判りませんが、**湛** 可哀想ですね。

樋泉 可哀想ですが、やや大袈裟というなら、それが歌舞伎名門の血統を受け継いで生まれた男子にとつての運命であり、天職ではないでしょうか。それが伝統ということだと思います。

陳 彼らは大学では何を勉強しますか。
樋泉 一般的には文系の学部に在籍するようですが。理系という話はあまり聞いたことはありません。

エンタメ・ビジネスとしての 粵劇の可能性

陳 それは香港と似ていますね。最近若

い役者の一部は大学生で、多くは中国語を専攻します。一人はちよつと例外で、法律を学んでいます。

樋泉 あとは大学生時代に歌舞伎に興味を持ち、歌舞伎役者の養成学校に入る例もあります。

陳 その点は、香港も似たような事情です。

樋泉 しかし、大きくなってから役者さんになろうとすると、どうしても体が硬くなっていますから、主役を張るわけにはいかならんじやないでしょうか。京劇というなら、下海——芸能という苦海に身をなぐ下した「票友」のように。

陳 こちらも全く同じです。

湛 ちよつと伺いたのですが、日本の役者さんは人気があるということですが、収入面はどのようになっていますか。いわば実入りが悪かったら、誰も好き好んで芸の苦海に身を投じない。好きだけではできませんから。役者を目指す動機・魅力はなんのでしょうか。名声でしょうか、収入でしょうか。

樋泉 歌舞伎役者の家系出身者は別とし

て、おそらく歌舞伎という芸能が好きなんじやないでしょうか。そのうえで、努力によつて名声と生活がついてくるわけですから。歌舞伎という難しい芸を身につけているわけですから、テレビドラマとか映画用の演技にはあまり苦勞しないと思います。

陳 香港もそうです。ところで日本の一般人から見て、歌舞伎の地位はとも高いいですか。

樋泉 その昔は「河原乞食」などと蔑まれていましたが、そんな蔑称は死語になったようですね。そのうえ興行会社の見事なマネージメントがある。そこでも女性客がドツと歌舞伎公演に押し寄せるわけです。歌舞伎公演の中心である歌舞伎座の公演など、いい演目とか人気役者の揃い踏みとか、なかなか切符が取れません。

陳 香港では八〇年代にはまだ若い観客がいるにはいましたが、今は粗方がお年寄り。如國烈の調査によると、典型的な粵劇の観客は六〇歳から六五歳とのこと
です。

湛 そのうえグループでの観劇が主流だとか。

樋泉 日本の場合、私の経験からいうなら、一〇代の終わりぐらいから高齢者世代まで。やはり主流は女性です。

樋泉 香港にはプロの劇団はあるんですか。

陳 実は香港では常設の劇団はあまりありません。一つ、二つしかないんです。ほとんどの劇団は興行を打つたばい便宜的に結成し、興行が終わると解散します。次の興行に際して、新たに結成するという形です。

樋泉 それではビジネスとして成り立たないでしょう。伝統的な文化というのはとても重要だと思いますが、日本でも香港でも、いや世界中どこでも事情は同じだと思いますが、ビジネスとして成り立つことが劇団自立の第一歩であり、そのように機能しなければ伝統文化というものは衰えてしまうと思います。確かに政府から公的な資金が投入されることは重要なのですが、これだと政治に左右される死んだ文化になってしまいます。

真に生きている文化、社会の中で躍動する芝居というものは、役者から裏方までの生活を支えられなければならないのではないのでしょうか。だから乱暴なようですが、伝統文化を活かせるかどうかは、ビジネスとして成り立つかどうかにかかっている。ここがポイントだと思います。

もう一点、やはり粵劇なら粵劇に入れあげるようなパトロンの存在も重要でしょう。鼻眞の役者には、物心両面からとことん尽くすことができるような「お大尽」の援助です。

芝居とパトロン

陳 ちよつと補足させていただきます。粵劇は香港では単なる香港の劇の種類に過ぎない。観客は多くても七〇〇万人しかいません。ですが一九九七年の返還を機に北京語を話す人が増えたことは、やはり粵劇にとつては大きな衝撃です。たとえば広州です。広州の人口は増加

傾向にあります。反対に粵劇の観客は減少しています。それというのも外来の人は全部北京語を話すからなんです。香港でも同じような傾向が見えます。北京語を話す人にとつて粵劇は判らないし、興味も湧きませんから。日本の能や歌舞伎と違って、粵劇は地方劇です。全国的な芸ではありません。長い歴史があり、文化的背景があつてこそ芝居に足を運ぶわけです。でも、たったの七〇〇万人の人口しかない香港では、粵劇の観客の広がりに限界があります。

樋泉 それは香港だけに限ったことではなく、中華文化の精華と讃えられる京劇にしても、観客の減少は否めない事実でしょうし、だから芝居がかつて秘めていた世の中に与える影響力がどんどん弱くなってしまうんです。ここが問題で、ここをどうすればいいのか。香港ではどういう風にすれば、昔のように誰にでも受け入れられるような姿を取り戻せるのでしょうか。

陳 その考えには異論があります。やはり現在の粵劇は成長期で、衰退期ではな

いんです。私は逆に成長していると考えます。ただ心配なのは、将来、観客の減少は避け難いということ。それというも香港における北京語人口が増加の一途を辿っているからです。

湛 今一番大事だと思うことは、やはり現状維持。ともかくにも粵劇の保存です。観客数もそうですが、役者の質にも気を配らねばなりません。目下のところ観客は増加しています。ですが最終的に問題となるのは芸のレベルです。つまり舞台からは確実に観客は離れます。学校教育の面では教育局の政策もあり、六歳から始まるので問題はありませんが、問題になるのは政府が一律に資金援助していることです。

たとえば劇を上演したい場合、現在では粵劇発展基金に申請すれば資金を仰げます。行けばお金がもらえます。良質の劇団だろうが、質の劣る劇団であうが、無関係に一律で劇団の要求に応じます。だが、舞台の質を高める必要がある。芸そのものを高めないと、下り坂を転げ落ちるように粵劇の芸がダメになってしま

います。なんといつても観客の目は誤魔化せません。客の数を確保し、舞台の質を高め維持しないとダメです。そして役者を育てることも。

上海から戻ってきたばかりですが、香港の西九龍文化区に戯劇中心があることはご存知ですか。目下、その戯劇中心は建造中ですが、関係者は粵劇だけでなく、京劇などの戯劇にも関心があります。

今回、上海に出掛けて交流してきましたが、上海の市政府が破格の予算を使っていることを知りました。たとえば、ここには舞踊団があり、小学校から大学課程までを備えた舞踊学校があります。四年間に一〇億元を投じて二つの立派な劇場を建設しました。蘇州方言で演じられる蘇州評弾にしても、蘇州方言の判る人は少ない。だから、その芸に耳を傾ける人も少ない。にもかかわらず政府は採算を度外視してでも莫大な予算を投入する。

「京昆 follow me」という番組を見ましたが、その中で京劇に興味を持つ若者

を募集し、実際に彼らに京劇を稽古してもらうわけです。その若者が将来、京劇役者になるかどうかは一切問わないのです。

ともかくも中国では大金を投じてでも京劇の裾野を広げることを狙っています。そこで「学校における正規の課程から始めないといけない。このやり方は大金をドブに捨てるようなものだ」と彼らに助言しましたが……。現在の中国は本当に金持ちです。金の使い方が半端ではない。京劇は全国的ですから、戯劇学院の関係者から聞いた話では、志願倍率は二百倍だそうです。でも香港では粵劇志願者は二百人どころか、十人もいません。ですから先に挙げた戯曲学院などは学生集めに四苦八苦しているところです。

陳 戯曲学院だけの話で、好条件の受験生は全部戯劇学院に行きます。明るい未来があるからです。卒業したら映画に出られますすね。たとえば黄秋生はこのOBで、すでにスターです。他の学院、たとえば舞踊、テレビ、映画、音楽もありますが、戯曲学院の受験生の条件は確

かに少し劣っています。毎年戯劇学院を志望する人はおよそ三千人ほどですが、戯曲学院の志望者は二〇人ほどに過ぎません。

樋泉 ということは上海では政府というパトロンを得て芝居が盛んになりつつあるが、香港では将来は危うい……ということでしょうか。

陳 現状のままでは……戯曲学院は香港でなかなか学生を集められませんので、様々な工夫が必要だと思えます。そこでは中国で学生募集を始めました。毎年三割の新入生は中国からの応募者です。粵劇を広げるには省港澳——広東省・香港・マカオ——は協力し合わなければいけないという考え方を踏襲しています。

樋泉 経済的な将来図からして、香港とマカオと広東の一体化が盛んに論じられていますねえ。そんなことと関連がありますか。

陳 少しはあると思います。私たち香港人はあまり悲観視していません。演芸学院は新人を育てるところの一つに過ぎな

いからです。粵劇役者を養成する場所としては八和粵劇学院もあれば、粵劇役者の家庭もあります。この二つのルートを通じて粵劇舞台を目指すことができます。

伝統芝居を現代社会に

樋泉 歌舞伎そのものは古典ですが、ここに新しい考えを取り入れた脚本を書き、新感覚の演出を加え、より現代に寄り添った、密着した形にしようという動きもあります。粵劇の場合、そういう風に新感覚の脚本家、あるいは演出家はいますか。

芝居は役者だけでも、役者と観客だけでも成り立ちませんよね。ここが大切だと思えますが、やはり伝統的な芝居であれ、現に生きた芝居であり続けるためには、その時々々の社会の風潮を舞台に表現することは必須条件でしょう。ならば新感覚の脚本家や演出家が絶対に必要だと思いますが、香港では如何ですか。

陳 います。子供向けの脚本もあります。小学生向けのものもあります。新しく書いた大衆向けの脚本もあります。言葉をより分かりやすく書き直しました。

粵劇がとても盛んだった五〇年代を代表する脚本家と言えば唐滌生（一九一七—一九五九）ですが、当時は上演時間が五、六時間の粵劇が多く、八時間開演で幕が閉じるのが翌払曉の二時、三時。今、こんなに長い芝居を演られては観客が持ちません。そこで劇情はそのまま生かしながら、上演時間を三時間から三時間半にぐっと短縮します。新しい脚本も、そうです。ですから七時半開演で、十一時から十一時半終演ということ。そういう動きになりつつあります。

樋泉 中国では芝居にしても映画にしても、どうしてあんなに長いんでしょうか。現代人には耐えられそうにない長さですね。ですから新解釈で古典モノを大胆にカットする努力も、伝統劇のすそ野拡大には必要じゃないでしょうか。

毎年五月から六月にかけて、中国から劇団が来日しますが、やはり現代の日本

人の「日常時間」に合うように大胆なカットが試みられています。ともかくも昔のままの「大軸戯」(通し狂言)の長さは、現代人の忍耐力を超えています。

陳 それは中国の伝統的な芝居は本来が神様に奉納することを目的にした「神功戯」だからです。神様の誕生日や「打醮」(祈願)があつて、みんなの浄財を集めて芝居一座を呼ぶわけです。これまでも各地の農村に出掛けて神功戯を見ましたが、夜八時が開演で、深夜十二時に少し休憩し、十二時半に舞台再開。それから夜が明けるまでずっと芝居が演じられるわけです。農村の人たちは布団を持ってきて、食べたり飲んだり寝たりしながらの芝居見物。これが伝統ですね。樋泉 以前は香港のそこかしこで廟会(縁日)がありましたね。七〇年代の前半、四年ほど沙田の下禾輦に住んでいましたが、その集落の守り神様の廟会の時には、まる一日かけた「酬神戯」(奉納芝居)を楽しませてもらいましたが、そういう習慣はもう香港にはないんですか。

陳 まだあります。あまりないですが。樋泉 どこで見られますか。

陳 大体旧暦の年末に香港の大きな圍村(村落)で打醮があります。打醮は十年ごとに行われます。元朗の下村や錦田の圍村では、夜の八時から十二時まで、少しの休憩を入れ十二時半再開。そして朝まで芝居は延々と。今ではほとんど「太平清醮」の芝居に限りますが、この方面では田仲一成博士の研究が詳しいですね。

樋泉 伝統的には神様への奉納が伝統芝居のルーツでもありますから、舞台が延々と続くのは判ります。でも伝統だからといって、それをやっている、だんだん人が見に行かなくなってしまう。そこで可能な限り短い芝居に切り詰めて客に見せる工夫をしないと、やっぱり伝統そのものもなくなってしまうと思います。

樋泉 伝統の旗を後生大事に掲げることも重要ですが、それが人々の伝統離れに繋がったら元も子もないわけです。陳 それは香港でも試みてはいますが。樋泉 日本をみると、田舎の神社には舞

台があり素人劇団の奉納芝居があつた。いつしか忘れ去られていたものが、一部ですが、最近ではぼつぼつ復活しつつある。効率第一に(は)走り過ぎた社会の動きに歯止めを掛け、潤いのある生活を取り戻そうという意味合いから、古いもの、打ち捨ててきたものを見直そうという動きの一環だと思えますが、香港にしても中国にしても、それがありません。

陳 香港の場合があります。たとえば神功戯を演ずる劇団です。なかには規模が小さく、プロの役者が一人か二人しかいない劇団もあります。主役以外は全部アマチュアですが。孟蘭節の時に地域で行われる小規模な打醮がそうです。

じつは香港のマスコミは粵劇にあまり関心を持ちません。新聞で粵劇の記事を見かけることは極めて稀です。テレビもそうです。粵劇は周縁化されてしまい、主流の芸術や娯楽として見なされていません。唐滌生が活躍していた五〇年代には、マスコミにとつて粵劇の動向は大きな話題でした。粵劇映画の全盛期です。いくつの劇場では、いつも粵劇が掛

かっていました。

しかしイギリス植民統治時代ですから、学校で中国のものを取り扱うのは政治に繋がるという理屈で、中国関連の物事はあまり奨励されていませんでした。粵劇は、その象徴的な例でしょう。

八〇年代に入り、中国とイギリスが香港返還について話し合いを重ね、いざ香港返還が実現するとなると、香港人が目覚めたのです。自分たちの伝統文化を新しい視点から見直すようになったのです。そうして、伝統再考ブームが起こり、粵劇の再興が見られるようになったのです。でも、これまで繰り返したように、将来に対する危惧の念はあります。現在の問題は多くの若者を粵劇役者に迎えること、それに伝統芸術の保存と観客の底辺拡大です。

なぜいま、香港で

《粵劇・毛沢東》なのか

樋泉 最後に伺いたいのですが、来月の国慶節に北角の新光大戲院で毛沢東を主

人公にした粵劇が公演されるとのことですが、なぜ、この時期に、香港で、という疑問を持ちましたので。

湛 これは新しい脚本による舞台です。

この脚本を書いた李居明さんは元来が風水師で、お金持ちです。彼のファンがお金を出し、彼が脚本を手がけます。脚本の出来栄えについては、低い評価が聞かれますが。

陳 そう言わないでください。良いという人も悪いという人もいます。評価は分かれますね。

樋泉 プロの脚本家ではないからということですか。

陳 本職は風水師が、すでに二〇本以上の脚本を書いています。

樋泉 なぜ、この時代に毛沢東なんでしょうか。

陳 彼の電話番号を知っていますから、なんなら教えますよ。ご自分で尋ねてみてください。

湛 香港には言論の自由がありますから、どんなテーマであれ問題はないと思います。香港独立を唱えない限りは大丈



新光大戲院の
《粵劇・毛沢東》の広告

夫なはずです。

陳 今年は文化大革命終結の四十周年だからだと思えます。この演目は、私が知る限りでは毛沢東を称えるテーマで貫かれています。一九七六年に毛沢東が亡くなり、四人組が失脚し、文化大革命が終わった。こう考えると、いま、それを演るのはちょうどいいですね。

樋泉 たくさんの人が見に行くと思いませんか。

陳 分かりませんね。まだ上演されていないから。

樋泉 同じ時期に蝶々夫人がテーマの粵劇の公演がありますか。なぜこの時期に蝶々夫人でしょうか。

陳 この演目は一九五三年に紅線女、馬師曾、薛覺先が舞台に掛けたものです。湛 これまた当事者に電話で直接訊いてみたらどうでしょう。それほどに「敏感なテーマ」ではないと思えます。今度の劇団は以前に《徳齡與慈禧》という粵劇の公演を行いました。彼女は新編粵劇を演じるのが好きです。ですから《蝶々夫人》の公演に特別な理由はないと思いま

す。宣伝資料によると、以前、彼女はご主人と共演するチャンス逃したから、今度こそ夫婦で共演するというこのようです。

陳 私からも聞いてみる事ができます。分かったら教えますよ。特別な理由はないかもしれないが、聞いてみる事はできますから。

樋泉 本日は貴重なお話を伺うことができました。またお話を伺いながら、半生ほど昔の香港での芝居漬けの生活を昨日のように思い出すこともできました。改めて感謝致します。今後ともご教示をお願いするとともに、香港粵劇の発展のためにご尽力されることを切望致します。

二〇一六年九月七日

香港第一日語暨文化学校